朝夷巡嶋記

第六編

三

13
939
N28

イ 13
939
14

東都　曲亭主人編輯

後輯第五十二　家廟投入花　弟迎常葉枝

再説稲向判五い義秀一三共侶ふ田鶴媛の亡體をんとそ立んとてる程よ次の間ふ人ありてうち嘆ぎつ韓楮の隔亮をやとう推ゐうくをこそれば是別人るらむ廣光ゞ妻浅良井へ當下判五一三ホハ墩馬ゆ又欲びて誰るるうえとゝ思ひよ小三二とのく母御よりもおんゑも恙るゝ事一欲大慈の息子ハいくゞぞゝ。圖らぎりけるけふの騒動殊さらゝ女伐ゝ稚児ゝ側杖打れゆらぞゝと思ざるふゆら祐ども是彼支のゑ母敏くてと同ゝ暇るゝ事ゝとゝへば浅良井ハ勝を進めて否小三次も恙るく。庖温のうふ侍るかつゝ鄙ふ御内ざゑの人ゞゞ殺立れて

いとも危くえゝ折加勢を請んとおもひ一ぺ小三郎が色と援て背門より出く彼此る里人ふりを告駈催してかつり来ぬれど朝夷ぬゝの武勇まるて彼同類る草賊ホハ一箇も送らぬ撃殺されて又彼鐵盾矢藤五も立ゝて逃亡るるを折ゝるのるれが里人連をぞ侭ふ背門よりかへ伯りあれかくて又御内人の浅痍おふさるものもれがそを勦て膏茱を打せ伯り又草賊ホが亡骸をのそ出さそ鮮血の汚穢をあちこちと洗拭せるゞゼ程よ聊時も移りぬ。こく里人ホを還しる件の事の趣を報まゐらせんとおもひつ次の間まで来るれど朝夷ぬゝと物々こそひの最中ゆゑありけれ言葉の腰を折らゞとそひとり彼処伯りゝ甲斐ホ朝夷ぬゝのうへるども問ぜゝよく呼えさ今さら思ひ誰がうへも危うけ禍鬼を輒くうちも禳れされば御内ざるの人々ホ命を隕せゝのゝ伯らぎそのの歎びまりえくゝ只痛ゝ幼々さるのことのひつ眼包を推拭ひく。

義秀ホうち対ひ絶て久ゝ朝夷ぬゝ主従の危躯をあぐく救れる恩義ハ須弥より高ゝべくゝ母子が二とせこのゝ縁ホ連る逗留の庇伏ハ巨海より高深ゝ今よりてめぬとあぐら折よくまゝ渝せめひてゞも身剽ゝ盗賊を駁を拂ひのひゝ敷ゝの中る歎びの再會にて伯るれと只管稱て已ざりゝを義秀ハ呼めぼゝ咎をぞ何のわん去歳よりあんの心つくゝハ大々さるゝぬとあぐら窪もてえぐ先めぞゝ扶伯よりのあんの働ゝ郷ホ危窮を拯んとそ里人を駈催ゼゝとる現その才覚あるりあり寔よ武士の妻るゝゝと嘆賞されが一三も判五も共よ感莫とそれのるるぐゝの月ごろ。友鶴が長ゝ病著又身まゝりゝ裏の事まぐ資られるとヨヌゝうちつぎる辛るゝごとよの人ざるの微りせぐ心つれるきとのるゝんよよゝ趣舎を致ゝゝと報るを呼て義秀ハよく稱賛まゝりけるゝる程よそ黄昏時よ

なりしが判五ハ左右をきつと見ていつまでかくてあるべきぞ孫が亡骸をかき抱きさらに誘
ひ合せて身を起せバ衆皆齊一うち列立て縁頬より出ゆくにあ庭下
駄一雙ある判五ハ手ばやくこれを穿て朝夷なし先出よ我们三人ハ背門より
遣らんといひつゝ軀て引かへせバ浅良井も一三も後方に跟て退けれバ爾程に
義秀ハそが侭庭にいち出て巻石傳ひのあちこちと樹植に添て只ひとり乾浄
房に赴けバ打抜れたる障子の隙より燈火の光幽なり彼ハ持佛の間なりし
ならんと思ひつゝ猶近つけども判五ホハまだ出て来ず義秀その性急なれバひとり
縁頬に登りつゝ障子を颯と推開て進ミ入らんとする程にはやおもひかけ
なき一箇の女僧が嬰児抱きて前面に立り義秀うち驚きてそ母なれ
圖らざりける對面に何の程より此処にゐたまひけんと問せも果ず右手に爪縄
數珠ぬり揚て丁々发矢とうち居て涙に曇る声を戦し別きてより早や四

歳雨にそ隔れ日に照されて昔の姿ハあらずなりて旅宿にいつて客爰なん身が
目にハ母親と見られしその不思議さよかゝる乳をを推せし乳母も親とのハ
あしめけるかねども汝ハ渝ぬけなくも實の母君菩提の前よりも代りし
折檻の數珠ハ親御と佛の慈悲智者にも千慮の一失あり愚者にも一
得ありとぞや汝いとも浅ましく若輩ながら乱を取るよしあらんと亡母君の教訓
ありと思ひ腹も立ぬがむ諫言のいともあまりと海よりも深き恩にてつらつらと
思ひへて一年来巡り國々をおとづれ身の風声隠るゝければいと頼しく其日を
送りしに又あるときハ危き目に安からぬ日を送りそをいかにぞと問れ然ば初安房にて
別れてこのかたハ追脱て龍堀親子鈍佛ホと鏖にしたるぞかし
養育の恩義の爲にハ勇敢傳しといふとも鎌倉にハ和田殿といふ歴々とし
たる爺々君あり亡母君の遺訓を思ひ千金の身を能く卑劣なく衆

系譜。うち向ひ合ひ偏に忠義の血氣より生ぜさるを誉べ死するあり。
これのみ年ごろ年ごろ宿りと投んとすく人もこの頃武勇三昧山主麓平
太ぶ山寨へひとり趣いて衆悪と夷けあひ事竟を折救ひとりくる少
女ぶ小蔓をれば聊その甲斐あるふ似これ初い迷よ考ふるけれべ伉俠よ
ふ類しと大勇ゆめ〳〵ぞ有右而圖らず環り合ふ一二ぬしよ想ふ
れそ。その女児と娶りるぶうその有身を知りくも下野を避近しくる友縫を家
遣んとそ心つよくも捨て生ひ捨ひより罪人とまりあるものもまこせ漸く
寃枉釋てもそ妻奴子ぶんくそ只友人を救んとそ生死を孚ふ陸奥る戦
場よ赴ひ捨ひより憂よ泡堪ぬ妻子ゆ想死ぶ去せゆ再度の討ゆも
攻煩ふる兇賊経任を數を捕て鎌倉殿のおんゆふ國の毒蟲毒を芟拂ひ言見
冠者と救ひ半と為ゆ恥辱と雪められい勢ひ已とぶりけん勇士の本意

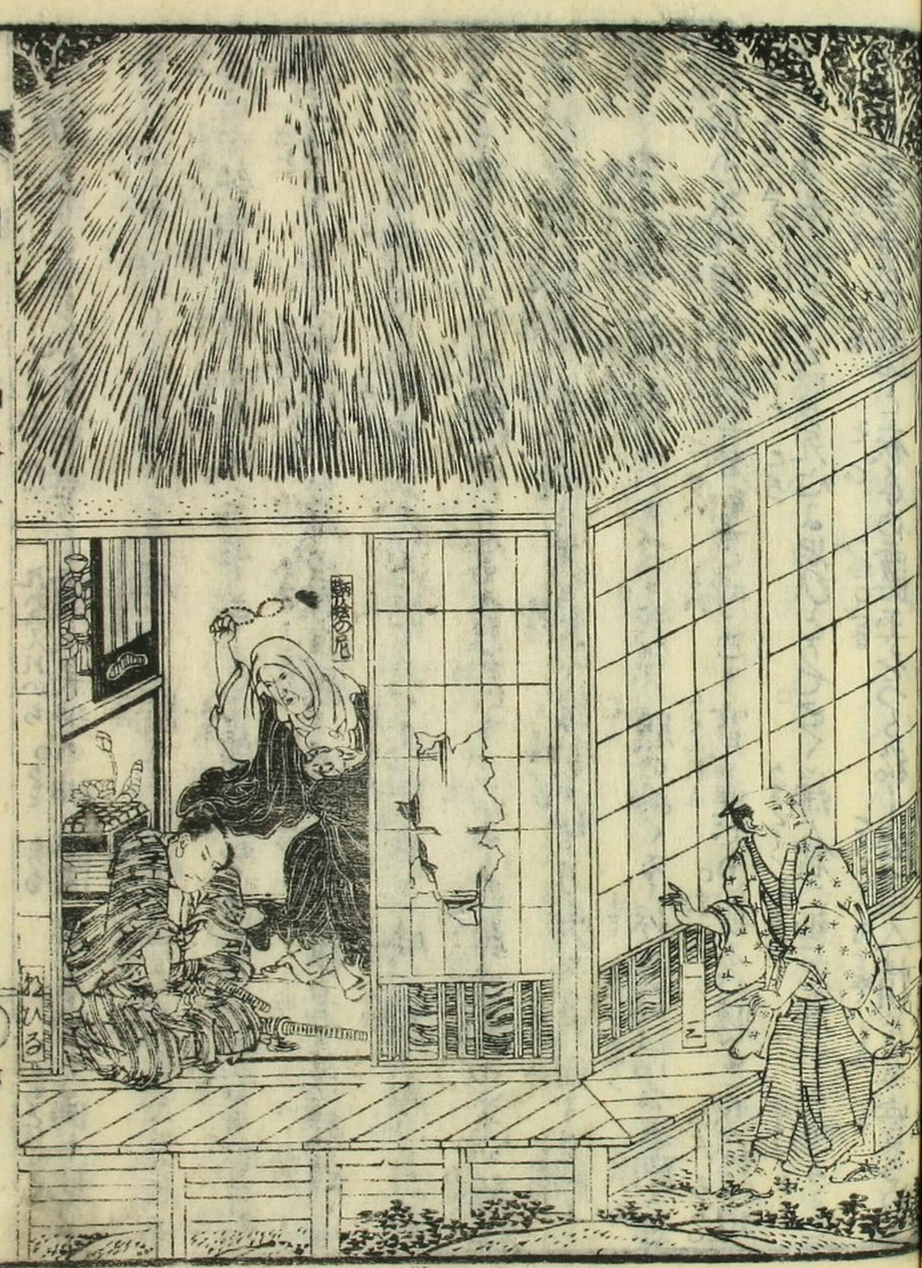
るべれども彼地ゆ光仲ぬしの相伴んとのれを鎌倉殿よりいまぐ徴れせ父
義盛ゆ召人さゆよ推て参ゆ要ゆとそ袖振拂ふて陣中ゆ脱れ去るゆひ
ゆ光仲ゆい他の功と竊ふうとく罪せられ言見冠者ゆる筋ゆそゆ身を
禁錮せられ。そのおん咎ゆこの一條のみゆもあるぎれど彼人々と共侶よ
鎌倉衆参りゆゆ誤奸口と用くるより図らずと彼人々の資と殺るゆ
くんと志のゆりよ高い名を取んとのゆ浅已と潔くせんとそゆ友達と
苦しゆ鄙語よゆ佛造りと魂を入れ似ようとくゆ忠ゆ人の行
ゆりと親よ勘當票ゆりとも折を伺ひ人よ便りそのゆ幾遍とゆ勸解
ゆる子ゆ孫道ゆ〳〵ぞ況ておん身い新恩ゆりと遠離られとゆゆ伊豆仲光時ヨ
病よりと参々公よ疎れゆひしとおん母君の恥らひと憤りよ堪ずりけんゆゆ刃ゆ
伏ゆひ。その折おん身とゆよ任と御館と潜び出さゆ後々のゆ云云と仰

送させひしら安房の田舎より鉢盞取らして世を渡らせん為めにとて又一生涯浪
人の世なれも人なれも後いぐ父子々公より肩を働けとの御遺言にはべるぞ一勉学ぶべく
名を揚身をも起して鎌倉へ還りて親に對面せよと祈らせ給ひし母君の恩
慈愛にさえられし比詳に伺へばはりしをうちに忘れてうるぶ後に國に功ある今この時に鎌
倉殿へ出るまうしドカロ人さえ絶び親ゆもわりと高ぶりある我強の性根をうち
直さんとて母君に代るの老の杖るべく子と歐んとて持ざりし数珠の緒さえ打断
らび拜巡やし霊山天地の利益無絶く後の世に地獄に墮ん悲しさに世を
捨られつ世を捨てるに捨るに捨る恩愛の網に浮むいかん身の安危并に女兒
小夢のゆくえいかに後世の障りぞとおもへども只ひたすら世の風声に耳を敢て
熊野詣の道者宿との里人とせんとりみく道つれなるりしより具に語ひ
身のうへ一三四しのうへいかに友鶴とのゆさえはばかりに小夢に似たりし今茲

越路を巡まる序に一三四しに音つれて絆の虚実を問へば欲時冥よりに
稲向氏三くらの親連に年来小夢を艱育の教びものいまわしこそとけん
かくやさべ死とおもひぞ蘊る浮世の塵に風立騒ぐ芦磯波や三國の浦の忘貝
忘れて年を歴しのれをこれより引る因恩愛の網に狂に延虫小舟に乗の里に来
これば折ふし佛支の餅配りとくあるべの翁に呼留られ求ぜく杖を休るてに
法捨の摂待宿も盡に縁しと思へども一三四しに思ひ遣せ初見参の人
人に海松の如けく死亡し麻の法衣の浅すれ乞食波女々がつまとそれ如此々々
と名告りれんや知られくれば是非もるしつれ名告りれば知れ身の為めも小夢がるもの
恥るべしと思ひ入て外々しくそ伏女中に案内を護持佛堂に却死ぬ田
向の数珠に接くるち仰瞻る新位牌に妙真玄諦禅定尼建仁三年五
月二日孺人某氏五十五歳と讃れ又一箇の新位牌に妙孝至貞大善女

建仁三年癸亥四月十八日俗名友鶴乳名小蔓子年廿歳と誌されたり。嗚呼是はいかにと胸塞れ涙頬につたひ落て回向の念仏も出ばこそ佛の御前よりうち俯しく前後もしらず暫時泣しをやうやくに思ひかへしく絆の霊を且ぞよ五月二日の精霊は稍向ぬしの配偶にて友鶴が養母なるべし至貞善女の霊前に水あまさ手向られし母屋に嬰子の啼声きこえれば友鶴はその産にて遂に身まかりしなるべし。それも音に鳴く杜鵑子で子にわかれ子に引れて窃に索く来もせず代かな歎死をまぬがれぬ垂葉恩入無為報恩者と説せ給ひし御仏の教に悖る冥罪あるべく襁褓の中より今や二十年往方も定かならざりし女児が死後に逆縁の回向せよとて留られたる身の罪障こそ浅からぬ阿三殿もさてゆかぬえざれ一三ぬしにもまず遣せば窃に出てあるげやとく立すくまれど腰攣く膝ぶるぶる軟節稚の杖に離れし心地して又うち鳴ても回向の鉦にも紛れぬのれは母屋なるにぞあり。

なり皆あまる小児の啼声ハ初孫なれば外ならず息の火そむれば切てもの心遣ひにかもあるべき迷へばうへのそらに薫れる香の烟も胸に満て身とうへ雲とうへなるまでに涙の両ふりをちらく澄ぬ心て墨染の法衣の袖を絞る折から俄頃に烈しき母屋の騒動然れども身が陸奥より帰りきあへし瞬間に賊徒を亡しぬかおあらう彼盗賊の頭梁なる鐵盾とかいふ奴なんぞ嬰児を捲攫く金に換んと虎狼の强慾両個の公羽に禁められて有繋におん身も撃難き流言葉戦ひあらまでに取るごとく呼えしが留月はいよく驚れて以も居られぬ起つ居つ窺く障子のあなたより彼鐵盾が嬰児を研に攫く擲ちる勢ひ庭をうち越てあの障子に骨さへよ衝抜擢かく投込れぬるこの嬰児を両手に受留めしがここにもあらぬ物怪の幸ひ身に一点なかりも恙なく嗔んとするを揺揚て銜る乳頭を含せつつ吸一吸く歙呿々々とそが促睡やがくすぐ覚ぬは只是この児の命運の。



愛敬交の神
聚岩
宿家信
初到鎌倉人
常盛
義光
くろ井
丸

特に勤しほのこゝろなりしで。年来巡りし霊山異地の神も護らせたまはず。仏も救はせたまはん不思議といふもあまりあり。かく厚きに就て落る涙を禁めがたく。この本尊の弥陀仏を且く拝ませまゐらせぬとてぞ。かくこそしく公輔達がおん身をうらみ言なぞその縡定かに聞えしかば。この嬰児は去歳の秋友鶴が産し女の子なり。名を田鶴媛と呼なしとも。その余の事も巨細にあらはされて。又涙ながら時を移しぬるがそれをかくてもあるべし。この田鶴とのは悉も見捨てまじ。公輔達がいつまでも物をあるはまへにて立出て告ぐるやと身を起しつる折にしもとおんみが外面より闌し障子を不意く顔対してたゞ言はぬばかり腹のぬくる侭に慄情なき剛意見は俗にいふ外視八目傍碁聖と呼れし寛蓮でも親には勝たず人の道亡母君の教訓ぞと賢き心におもひとりてとく鎌倉へ趣き玉へやよ喃かくくり返せし言葉の露と衣手の露玉をつらねし公道人情花も実もある

心の誠は猛く優く勇しき靭絵の尼と名に負る人柄なりければ義秀はそゞろに頭を低れ手を拱き黙然としてありしが膝折直して貌を改め。おもひかけなく母刀自に再会の歓びを述るにいまだ遑もあらで某が過失を論はれし縡の趣一條として理りに称はぬはなし。今の世にして義秀がかくまで拙をいはれんを他し人には誰かするべき。只是実母再来の告言と兼ぬるにいかで背き侍るべき。実に安くおもひたまへ。もしその小児が不測に必死を脱かくもありしおん身の左右のものに受留られしは奇なるかな現身を護る神も仏も求めずありとも外にはあらず。親こそ神なれ仏なれ。是養母の旧里を立ぬるとて別れまゐらせしその宵より一日としておん身の往方の心にかゝらぬ時もなければいぞ環りもあへんとて関の東はいふもさらなり四国九州の浦々まで巡り来る旅宿々々に果敢なき夢ばかり見えるから面影似たる人にも遇ひつは胸安からずとおもふ程に多田蔵人

光仲が尚并平こうしと死烏鵲川の母とうあそ危窟をあん身よ拯れる。縛の趣如此々々と近属奥の陣中わく彼人よ吐ーゞど光仲が太田の荘へ赴死ー比及ぶ。ゆゑ彼処ゆゑ定ゞ孤ゝ靴を倒て癖と搔く。心地のこーくゆひ死彼光仲が没迹ーも口いろ母の汲引よ依まろ。これらの奇遇のこゝろーくぐ光仲いろが親友豆その親い樋口三郎兼光とそ吟えれ渠大功あるこゝろ今一毫毛も恩賞ゆく選く罪と蒙ゆーい抑甚麽る政道ぞや又義邦い残珪片王鎌倉殿の宗族う且時夏と駄捕ゞる此度の軍功記きゆゆ某い鎌倉の沙汰をけゆまで知らざりーふ毒も他ゆをてるゆん身の意見その義よ稱ゞう身の非と飭ろゆわらねども嚮ま某ゞ光仲ホと倶ーて鎌倉へ参ゞゆーい名を取んとの為ゆもゆーぞ親と肩衝くまろゆーー。彼経任を駄捕ゆーい口い義邦の為ゆーて鎌倉殿の為ゆせざろ死ゆぞ

始終の軍功い惟光仲のうゆゆり。然るを某彼人ゞと共よ鎌倉よ推参ゆ人の功を搔取ゞて己ゞ褒と賞ゆゆ似ゞう。と思ひ不けれゆ推辞ゞ。ゆゑとてゆりて光仲の不測の罪とゆゞうんい政変のゆゞうゞ所為ゆゆ。ゆ頭をうち掉て否ん身ゞてさい思ひもせぬこゞうゆゆ。これと異ゞ光仲ゆーい討ゆ大将ぞゆ伴んとゆられるゆ推辞ゆーて参るゞて君と重んゆる臣子の方とゆゞれ扶鎌倉詣登ゞて恩賞ゆゞゆ推辞ゞゞーて光仲ゆーよ譲らんよ誰ゞゆん身ゞうゆ俗とゆゞ誰ゞゆん身を礼とゆゞて。智者ゆも千慮の一失ゆり愚者ゆも千慮の一得ゆりとゆひーをゆまちのゆゞうゞーとゆられて義秀有理と暁ゞて慚ゞく頭を拍ゆゞ又ゆよゆゞうゞーと鞠絵の尼いとえゆうゞく扶い納得せられる迄よ旅ゞちゆゞとも鎌倉までいゆて死ゞゞけんとの田鶴とゆいゆて人よ産せーゆん身ゆが子ゞゆゞゞゆゞ初見参でゆゞ死よゞくえゆひゞと懐ゆ抱ゞーゆよゞーゞゆゞと

義経乃ひとくもつまと苦咲しとゝ立ゝる外面ゆハ判五一三減良井さゝ聚合て
をり程なとよけれと負共侶ハ進ミ入りくるそゞ中に一三ハ揖もせでうち微ゆ笑ゝ御
と寄まく吁めづらゝ大潴のお懐よ能たゝとゞ渡せられ三先の程より阿三
とのハ説れ談義ハ聽ゞ支ハく誰とく袖を濡さぬハ絶て一人もるゝを又歎
ひも大ゝるゝ田鶴とのハ恙もるくてそゞ侭ゝ身の懐よ熟睡ゝくゝるゝとゝ
千々の土産を齎せゝより二ゝとゝゝ元牽出物稲向ぬゝの大喜大悦その兒の
顔のゝんとりけんを辭の腰を折らゞとく急共侶ハ立在て久ゝう彼首ハゐゐ元
又改めく對面とゝめゝゝと隔ゝ元辭ハ判五ハ膝を進めく年来噂ハ傳聞る
友鶴ゞ実の母れと知ゝゞ留めゝ宿ゞゝ俗ハハ親の憂集ゆくこれゐ場ぬ
縁ゆ元某則判五ゝれ昔上総ハ在りゝ程ハ橋六ハと呼れハ兄の家智ゝ嗣
ゝ縁の川異ゆゝて路遠く假名実名同ゞゝねゞ索くく訪易ゝうぬを。

一二更ゝあんゝ多ゝり斯もゝうゝうゝ取合れて昔を相譚ひ慰ハ歓びれまゐれ
ゝ鶴ゝるとハハんや田鶴媛ゞ必死を救せゝひゝる。ゝれ身ハ則菩薩ゝ年来信ゞる
宝珠山の地獄尊ゆゞめゝんゞゝんとゝゝゝゝゝゝ厚くて彼首ゞ拝ゝりひ元。
元ハ就ても友鶴ゞけふまゞ存命ゝゝゝゝゝゝゝゝ彼孝行ハ容止の人ゝゝゝゝ捩れゝを
誇ゝもゝゝんゝ婆々さゝゝ二十五日の夢の迹覚て悔ゝ紀世間の花ゆハ嵐月ハ雲
盈れゞ虧ゝと知ゝゝゝゝ悟ゝゝゝ元ハ恩愛の迷ひゝゝとハひゝけて落る涙ゝゝ
拭ハゞ靭繪の尼も目とゝゝゝゝゝく恭ゝく頭を低ゝゝゝゝゝ懇切るゝゝゝ
辭ゝゝを摘めゞ辰ゝ元との限りゝく恥ゝゝゝゝ人ハ伝り世渡る楫の廻ゝゝく。
獨女と襁褓の中より親ゝゝゝとゝゝゝく進ゝゝゝゝゝ年長て索て来
べゝ元ゝゝゝねゞも恩と稟ゝる一三ゝゝ主ゝゝゝ子ゝる阿三とゝゝゝとゝゝゝ人
偽ハ賢ゝゝゝゝ捨ゝくゝて外ゝゝゝゝゝ宿所の麓ゝりとゝゝゝゝゝ門邊を過の

仮りの縁とく呼留られて誠の心操の具よ知らまく欲ひ仮り夫鶴の
ゐ〻も〻ゐまでも仮り名ぞ実の女児よ異るらぬ。このと〻来の市養育その甲
斐もなく先立て歎を送も形見の嬰児あん今偶のまゝ淋さを慰ゐゆゑ
わんとそち續なる幸まゝゐ心の中推量られて辭よ盡をくも仮り況て
阿三とのゐとれ彼とを淺らむのせられ。その歎びとゝくさゝゐ。ゐのゐも皆
過せゐる契りとて思ひ侍れ一三ぬゝゆ別れゝ比まで。直ゝ庇この歎びも會
話もヨヌれどこれも亦倉卒ゆ盡をぐゐゆ仮らむゝとのゐ。三領なとゝ
その該のゐゐら迭の口誼いとゞゆもゝ扨この女中ハ阿三とゐ友垣と結びゐる。
吉見冠者の御内人江三二の内室ゐく淺井とゐと呼れゐゐが下野ゐる舊
里よ殃危の起まゝ比ゐ稚児連く長逗留專女代りゐ追使れて大く貧にゐゐ
れゐゐと引合もれば淺井も鞆繪の尼と名告をゐ。来ゐく告夏甘ゐゐ

暮果て樹下闇涼ゝ庭の草の葉を照ゐも螢ゐ死人の魂ゐとゐ仮く客ゐゐの神ゐ
又置く夕露へ秋よりゐ悲ゝ死を夢ゐもゐ反田鶴媛が忽地覚てゐ嗅ぎ
鞆繪の尼が揺揚て敲死者を一三も判五ゐ〻く推禁めく否措ゐ〻この該〻
久ゐ熟睡ゝけれゐ物欲ゐて〻ゐゐ〻ゐ曩ゐ妹母ハ鐵肩よ蹴られて雲時イ
ゐゝゐども〻ゐゐ息生くさゐる恙もゐゐゝ母屋へ遣ゐて虻厭ゐの茶ゐ乳をゐ
飲せて持仏堂ゐく夜と共よ長物ゐゐをぐゐもゐゝゐやよ阿三とゐ母れを母屋へ
伴ひゐ〻夕饌ゐ羞むべくゐ〻ゐ来ゝかくゐゐゐども〻ゐゐもせん告ゐせん誘ゐくゐこのゐ〻ゐ
淺良井がゐゐゐそさゐゐの仆々さゐゐとお乳母よ遞ゐ仮ゐゐ〻ゐ三ゐて〻ゐひゐと
ゐよさゐとく鞆繪の尼が衣衿ゐ披く懐ゐゐ抱ゐ取ゐて生憎よ肩襲ゐ〻ゐ
揺揚く誰がよくと賺ゐゐ〻ゐゐ仮先ゐゐ程よ衆皆齊一刃を起ゐて後堂ゐゐ
赴ゐ折ゐゐ外面騒ゝく先逐走る里人ホが路次の小草の露ゐゐ拂ゐ態杖の音

いろめしく鎌倉より誼使ありとて出迎あれおやと頻りに呼門罵る声に判五ハゆご
ひ胄うち騒がしくあるを訝し何ごとと様て案内もあらで夜門鎖せる里の宿所へ
鎌倉より遥々と誼使の来臨ありろ由なくて。あれも赤矢藤五が類ゐのやあるべう
らん漫ふ門を推おしたる朝夷ゆへふ報く且一二三を出てへんせんをからせよ。
僮僕共ある妄益しやと立騒ぐ程しもあらず外には和田新左衛尉常盛門
前に乗居る馬より閃りと下立て江三二廣光と腰越獣六郎ホを相従へて進
ミく裡面に入りしが幾十人なる従者ハ俟ホく挑灯引提て前庭狭しと
續たり。縡の勢ひ今ほらようちも措べくもあらねバ判五ハ一二三共倡ふ衣裳を
更め出迎へ姓名を告て来意を問ホく。軈て客房に案内となれバ常盛ハ悠
然と上座に着く判五ホうち對ひ當所累世の里正と唱える稲向判五ハ
汝よな。常盛あん使と奉やをくあてに来ぬるも別義にあらズ。嚮に陸奥の戦ひに

賊主経任を討捕て非常の勲名隠れなき朝夷三郎義秀ハ汝ホ由縁ある
のれゆく奥よりこの地ホ還れるよしを将軍家頼家卿聞召れて召く来れと仰ある。
且件の義秀ハ乳名阿三丸と喚まで稱りし父義盛の三男なるハ。此度まで
ゆくそのゆえあり。去れども阿三丸ハ仙元時故ありて妳母栞まとりかれが抱きて
逐電あひりしより廿年ちかき月日を歴れバ。なりに常盛あホ来がホ老党まて腰越
獣六などもそら。その面影を認るものあらし。當時父が阿三丸に取らせたる倶利迦羅
といふ名刀ありけり今も屍失らで彼人これを持らんかれ。その疑ひ充ものに就く吉見
冠者の老黨なる江三二廣光ハ義秀と疎からぬ汝ホも亦由縁あるものとて。喚召
れしかバ冠者ハ塾居にありといへども。格別の義をもつて此度某に隷られたり。
義秀今へ宿所にあらんゑ云との旨を傳へよとしかれて判五一二三ホハおそるく頭を
擡て常盛の後方なる廣光を稍え出して疑ひ解けそうち笑まざるに。その鈍ひハ大人ろと

るゝも中みも判五い額の汗を遽しくおし拭ひ謹で稟さまう御諚うけたまはり
まし朝夷生の道中ゆゝ所労よりておりぬも後よ日と弥りしよりそけよせう
程くよ帰えせりとくまうゝ幾元ゆうんと応と立んとする程の義秀さたを衣
裳と更へ置横の蔭よをうち咳元く進こ生常盛よりち数ひく某則義秀
ゆうぬひけるに遠路の諚使よ迎送の礼整ゆる失敬い野人の習俗とろづ用
捨をゆゝし既よ諚意の趣い彼処よゆりて承りぬ不肖の某期せずして君父のおん
兄ゆゝ顔ゆること有ゝ元すぐ本意よ稱へりのいんや又ゆゝ伯兄をこのおん使よ立
られしい綬葛倒よ拠ゆる似ていとも恐惶こそ相別れしより天の一方朝野
処を異ゆしと成長りくゆへ父兄といへども面忘れしく凝ゆ元こゝら彼倶利
迦羅の短刀いけふまぐ腰よさゆる元とゆゝこの名刀の奇特よりて仇を殺ま邪を
退けるゝきくの霊應ゆり短くうんと欲まると元い九寸五分の短刀さり又長

かうんと欲まると元い三尺許の大刀ともなれり縁倉へ多ゝ日ようゆ大人の内さへ
紛れゆるべくもゆゆゆ兵この名刀のこゆうぐ某を衛育る彼妹母栞ゆ量裏よ
頭髪を剪捨く灵山灵地を巡礼しゝ圖ゆゝ宿りく後堂よ今尼
ゆゝ凛も赤ゆゝくゆ正しく証人ゆるべし某ゆりくゆ陸奥の陣中ゆく
光仲よ相別れく鎌倉へ参ゆゆよ光仲も義邦も不測の咎めを蒙りく禁錮
せられし事の趣げしも初く伝聞く駭嘆せゆとゆこゆれゆ推糸仕りく
彼人々の寃屈を釋ぜゆ友垣結ひし甲斐ゆゝゆと栞ゆよ勧められ某も尓
ゆへ近元よ首途致さゆゆゆ。とゆく折ゆくことのおん使を出船よ追風を獲ゆるゆ
如くいと欲しくゆゆと異議ゆく言ゆ糸ゆうせしゆゆ常盛も亦欲ひて応ゆ
る當座の糸諾某さへよ面を起ゆゆ欲ひゆりけこれゆ加ん倶利迦羅
ゆり栞ゆ。証拠分明ゆるゆへ誰ゆ和歌とゆゆ父のゆゆゆゆゆゆゆゆ

まれかくもあまた和殿軍功あるとして鎌倉殿より徴させ給へべ必ずもうぶ私の親疎に依ぶ死なせ給ふべ君ゆも父ゆも待るべ死和殿を伴よ旅るれば豆とも いろぐ者とそ侭夜を犯しく来るべとく准備ちゆへ〜といふ義秀一説に及ばぬ。ここもかくも仕ん。切くこの暁ちぐうち寛ちく休ひゆへとてくむ。

さて廣光も義秀判五一三ホに別れ〜後の情義を述く義邦より贈らるる書状をを義秀ゆを遞与しける當下腰越獣六郎ちゆう多くに進ぞ出く。義秀に額とうた。ん見覚へあるまーけれど某へ御内人獣六郎でゆく〜恥かーたとまぐ。むー大殿の仰を稟く和子を追蒐なり金澤なる野馬あそ苛く投られひ〜ぶ長生しる甲斐ありく又ん迎ひに参りう稚た時の勇力へ神ぞの憑さうん。と思ひなり〜へ僻夏ゆ果〜く日本國中に名くる勇士ぞうのひた彼栞ゆもあるをべ今宵へ昔を語出く笑るべくゆへいん。

あるめぞう。と真実ぞちこ思ふ辭に義秀微笑く結ひるたをを稱けるかて夜い初更の鐘の音ぞれば判五一三共侶ホ義秀が袂を掖く誘使へ舎兄に とぞ。ほに今宵のお宿を仕まべあへあるりホ端近〜南向の別席へとゆを常盛うち呼くその誘寝ホちろ思べ〜。あの暁ゆへ相共に必帰路ホ赴くべ〜れ〜と両三時の程ぞう彼栞ゆも對面〜く来〜くを問慰めそれ酒食の管待ぞべ〜ぐ三郎ゆへ家尊の大人より贈りゆる二種ゆ。獣六郎披露をぞ。といふれて腰越獣六郎へ外面ホ立出く両箇の奴隷が舁て来る行李司と披〜く時服一領をとり出つこれを縁頬よりて登べ常盛の若臺両名信濃驪の太く逞〜紀三歳駒ホ金具磨る鞍置て真紅の厚總被ぞを庭門よりぞ牽入ける當下腰越獣六郎へ義秀ホうち對ひく物云云と謁ぞれべ義秀へ件の時服を三びうち戴たち東に向く恩を謝〜馬ど一三ぞ受とう

しく判五と共に常盛を小書院に誘引り。ゆて判五に一三共佰猛酒食を安排して常盛主従を歓待す程に常盛に亦栄ゆる対面しく。その誠忠を感嘆し此度義秀に共に鎌倉へ行くせんとく。と叮嚀に勧めしかども鞆繪の尼を後にぞむ。和子を抱き君所を去り給りしに鞆繪御前の れ送言を空きうせでとおひし故へかれば厥の罪をゆるべたまふとも伯母なる今さ然るあん外なめもく。和子の首途をえん立給れべこの年来の本意を遂ぬ仏の道に入ようと。一日も後世のいとるみに暇へ絶てるものをいかでか鎌倉へ参るべきかの よりやらせめへとく。うけべくもあらざりけり又廣光に後堂ゆく浅良井小三二に対面しに判五義秀一三に妻子が寓居の歓びを述て友鶴が死を悼こと鎌倉の烏休義邦光仲の支の趣を。詳に報知しく既に如くなれども華ひに ちく朝夷ぬしの此度彼地へ召れぬべ遠らもとうぶ主君の恩免の沙汰ゆに

厥し主従安堵の日に至らべこの尼倉に迎とりて小三二も大人ちう吉左右を候うしといふに浅良井小三に耶憂を慰めく久後頼しくぞいひける。この時に鞆繪の尼も小書院より退ぞく又この團居に入りしに廣光に義秀の恩義の歓びを述るぞしく鄉に義邦の討ひく蔓二郎を太田の荘へ遣しる支の顛末渠が故事いと厚く心操をかくり出るに衆皆嘆賞せざるるもの中に判五に思ひあり白い鞆繪の尼ようち對ひてあん勿今尉殿の常盛鎌倉へ行くもんと宣せしとうけしゆへさりしゆゆしや。然しかく又約脚しく仏の如へ杖を曳るやうん願ふ所に足と駐めて田鶴媛を字云月ゆひ。某既に友鶴を喪ひく又妻に先立後れしべ。ゆの嬰児を誰がもしくよく衛云月ゆべ。この義をうりかうけしゆへと又他支もく留るゆえ鞆繪の尼に沈吟しくれ宣ふとるぐしかくれ仏に仕る身の俗縁に引留られく孫女の衛せんに相応しかしゆ所なりしし。ちゆゆれども友鶴が艱育の恩ゆへさて中途に

なく弟なりかれが渠に代りて田鶴とのゝ稍東西を知るまでまゝなる草の庵を
結びて外ならぬも後見せよかしこれも亦罪障の一つなるをもてもゆるさぬに又鉄が判五の
ゆかりて義秀頼に領かせて母なる留めてあれば其今より後身をもて君父に仕ま
らんこともかくもあるじの翁の庇蔭に漏るゝ身もあらしかが産せし女の子なく
生六月後も頼しからば田鶴は外祖に進らせん人となしてまゐらせよと判五を
含笑てその心安かるべし母はありて二三あり世帯を資けまからば田鶴媛ゆ佳
壻とりて佗との家を續せまるめでたさやと後々の商量早に整へば二三も
亦鉄びて廣光夫婦共侶に又留別の觴をあはせも雨時巡りしけりさる
程に夏の夜の寝ぬに明ると卿言けん昔の人の袖の香や花橘にあらね
どもくまとも常世の長鳴に八声の鶏の促せば常盛の従者ほどあまた立さわ
と散動て馬に履穿ち草鞋の紐し締てぞ居並びたるその間に義秀は

行装を整へて鉄撮棒を幾箇の奴隷們扛擔へとりて常盛と共に立
出まてぞ判五一二三を先に立て鞆繪の尼は田鶴媛をかき抱き浅良井を
眠げなる小三二が手を抜て齊一目送る縁頬の辺とりなつかわる廣光獣六
あん馬牽けと呼入まてぞ口飼圉奴が四たりしてまや庭门に牽居ほ。
馬の嘶鳴勇しき星间斑なる彼誰時北山下風凉しきに路のそがひと常盛は
判五ホをかへりて鉄びを述別を告そぞ俟庭にをり立て閃りと馬にうち
乗まてぞ義秀は人々に辞別まらひあへぞ兄常盛に推続てまく由し
あひと乗る駒の足掻もちやえ朝出立廣光も只判五ホを見かへりく
獣六ホこ後まにとりて従ひ由く衡門の外面にも根奴莖平覞の奴
僕が装沙措手桶の间々ふ竹帚を横たへて推並び額をつかせて会
萬福とぞ祝しける正に是功成てる後故郷にかへらざるゝ錦は被て夜

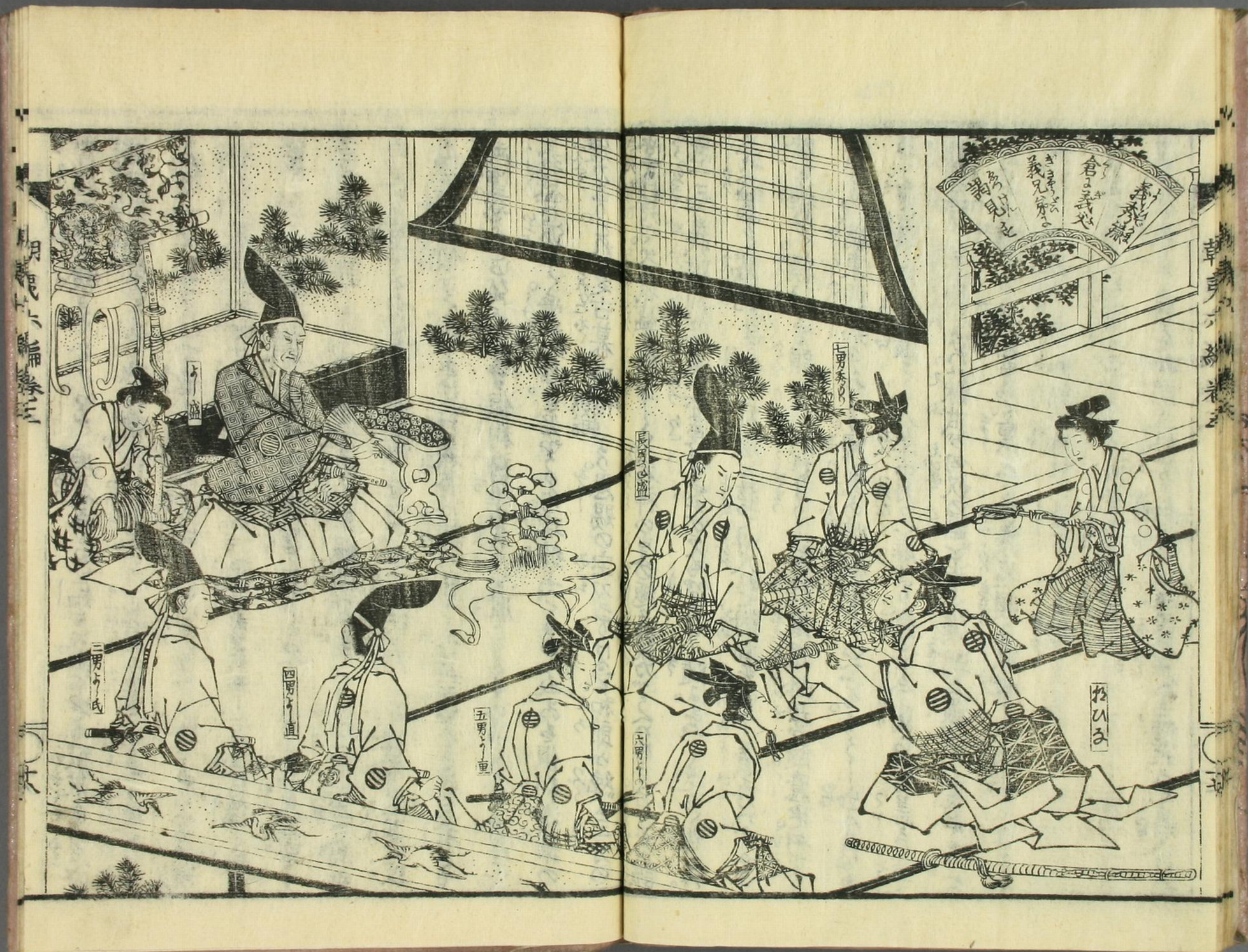
道を西くが如〜と古人のいひけん。義秀が鎌倉ぶりも現その時を得
たりしとく誉ぬりれるんなりける。

後輯第五十四

濱相撲禄物
小壺海大鱷

却説常盛の義秀を相伴さく口八晉路をのぞく程ゑ五月廿三日ゆ鎌倉
近く帰来ふけりこれより人を宿所ゑ走らしさく先云云と報しうべ義盛斜
るゑ敷ひく次の日の未明より義秀ホを迎へよとて一両名の家隷の新巳奴
隷と相副て賈越すぞ遣しるサ四日の己の時ぢりゑ三郎殿のゐん者とた人々
罵り騒くよるゐん常盛義秀三騎相並ひく今巷路の東る邸へかゝり著
程ゑ在鎌倉の老仆男女これをゐんとて取囲よれ門前宛市の如く晴がゆ
くも賑ひりさる程ゑ常盛ゑ且義秀を客房ゑ迎入れさ〜休いくぞり後

堂ゑ赴ぞ父義盛ゑ對面しく岩神の支の趣義秀ぐゐんいちと泰ゆが誠
忠一三が義膽判五が老実ゑ至るまぞその只もゆもせ〜隨ゑまべく迷ゐく報〜べ。
義盛ぬく感悦しく躯て礼服を整て呼入れて對面ゑ當下義秀ゆ
膝を進めく額つぞる頭を擡別れまりしその比ハ進退姉母が隨意ゑ何事る
ひひりろべ。稍東西を知るろより帰系の情願ゆりとゆへども。ゆくゐ出んがも
ゐく身の賤ぞゑ且羞しく十八年の月日を歴せり然るを今圖らずも恙ゐ尊
顔を拜しぞる歟〜さゆ蘇武が匈奴の國を去く漢朝ゑ還りしゆゆ
ゐぞと憶る氣ゑもゐく禀ゐるゐ義盛頻ゑ感嘆して適男子ぞりゆ
ゐむ〜姉母栞ゑが和郎を抱ぞく支りしゆゆ愆ゆりゐ〜ゆ海
しくゆゆりゐ往方定ゆゆるゐ〜もゐく恥て覇の年をあゐ記念のゆ姉母手ゆ嬉
めが教道ぞゐ〜れが〜ゐ和郎が武勇男と行状と世の風声も隠れゐく且又けゑ


二男よし氏
四男よし直
五男よし重
六男よし
七男秀よし
ひろみ

常盛が詳ふ報るまゝ。虚名なるを知るべし。その彼琴の尾が誠忠男魂なるのみ。その理義は明るし。亦窮ふ義を過て及ぶ所なるふ。むゝのみなる要る。大凡人の好ヲ人その友をるを知ることもいよる現吉見ヨヌ田の人々和郎が友垣締びゝふ器量を見るゝ。その餘ハ推て知べし。光仲ハ幸ひ某ハ預けられて當第よりとゝへども。ひまゞ恩を請うさらば對面と許ゝ。常盛已下の兄弟親戚ハ今朝より集合く次の間ふあんそ寛ふ和ひ。先ず盃を取ゝ。そ童扈後が酌ふ立准備の土器を取あげと三度傾けくちゝふれば義秀ハ謹で飲く土器を返さと。そ者とも御覧ぜよ。とひゝ。胥る。俱利迦羅の名刀を脱とりく父の母とりへさ。義盛ハ遠ゝく受戴ゝ。そ。とそんかうそ。現紛ふべくもゆゝふ。ふを俱利迦羅の短刀なり。これハ是古幕府頼朝より恩賜の宝刀なりけるを和郎が絶ふ三才の秋ヨヌ病よりく只管ふ法師ふもぐくとひゝぐ戒刀ふとく取ゝせゝり。母の鞘繪を喪ひ。和郎さへ往方のあれぞなりくるゝ。ぐ衍そうそれ。ゝを。うぐ児とこの宝刀と功成名遂くひり来ぬる吉事ハ。ゝ。そ凶事ハ成れり。世ハ塞ふ羽が馬るかもいよく秘蔵ふのへとく感涙數行ふ及びく。そぐ俱宝刀と返ゝけり父子の軟酬ふの支畢ぬび常盛も亦改めく盃をさも程る間の隔亮と推閑ふく二男二郎左衛門尉義直安房五男五郎兵衛尉義重六男六郎兵衛尉義信七男七郎秀盛八男八郎義國嫡孫右兵衛尉朝盛の子。常盛の後父弟荏柄平太胤長平内義長の子ホと初とゝく三浦土谷山内渋谷横山茂利の親族外戚処陝ふて進こ合まく食義秀ふ對面ふ。紛びを述向後を契まく又軟酬ふ時ど移ぬ。亭午の比よりよけり。これより先ず義盛ハ一箇の家隷を執權時政の宿所

遣して常盛越の岩神より義秀と名乗て伺ふのよし云云と報知せしかの使者程もなく帰り来て朝夷殿のおんゝ御所の出汰に依て迄又江三廣光なん舊の如く荏柄平太に預け置とおんゝ下知のゆとりなく義盛則廣光を労わく客房わく酒食を羞め更に又一間の家隷に雑色奴隷をさし副て廣光を相具して荏柄の宿所へ遣て程なく亂長も亦人々に先立て帰りけるかゝる程に柳営の走卒小壺の濱のおんゝ假屋より相州義時の奉署とて一通を持来りけり義盛即披見するに義秀今朝参著の由あり常盛喜び渠に小壺のおんゝ假屋へ来るべし者へ孰遣件の如し五月廿四日と書れたり義盛これを常盛及義秀に示せしかく先復翰を進らせつゝ使に返せ程なく常盛も義秀も猛に衣裳を整へ各々従者を倶して父に辞して歩走より小壺へ来りけり義盛これを見送りて三郎がけに著て

けふ将軍家の見参に入るこのゆとり速なるに吉事のうへの吉事なん寔に賀べし賀べしとひとりごち合点く越路の供に立うける腰越獣六ホを初として送る酒うち飲うに義秀が吉左右を今かと俟うけるこの時将軍頼家卿は色を好み酒を嗜み歌儛蹴鞠の遊興に夜となく日に継ぎのあるゝある時も富士足柄の山猟にくたくの日を弥り又ゆと玩小壺金沢の漁猟に日を消しのあるも放逸嗜欲に限りもなけれどこの日も北條相模次郎義時仁田四郎忠常比企弥四郎小坂太郎富部五郎毘巴八郎などに暇近習おんゝ供わく小壺の濱おんゝ出浦に網を引て齊しうける風波不順の故にやとりけん獲物は雑魚さゝ

るのみしばおんゝ氣色よろしからぬかれば是遊猟の甲斐もなく潜没する白水郎仰て天明栄螺を捕べしとくせとのたまへば義時忠常奉て浦人ホを呼よせ綽云云と分付る浦人ホは困て果て御詫でいとども今いこの小壺の

漁夫潜没する白水郎ひびとなりを義時守史ぞたへいるる故をそと同へべ浦人さゆ近属このうの洋中あいと大なる鰐の雌雄両隻のるる。そ先人食これを知らぞ曩さの濱の漁夫浦平と呼れしものが鰐ょ隻足を啖断をて忽地命を隕ぜーゐ浦人怕もとく没潜をせぞ。網引ょ幸のるたるも件の悪魚の所以るれべ浦平が女婿ゐりける浦太郎と呼るる婦翁の仇を復さんとさるる釣を造り。網と似りてかの鰐を捕んとせーゐもぞくるれども釣わも網わもかくらばを浦太郎ハこの故ょ身上いとく衰へて女房梭枝と何処へやら給事ょとく出る彼のれのこゐもゆぞ漁猟の便著を失ふるこの浦ぞ一人とて困窮ぞあのれ。願ふハ上のゐ威徳ぞて鰐を退治ーゐつべ。その時ょそゐ目前ゆて潜没をせ仕ゐそけふハ免さをゐくーと辭弁一推辞ゐ沒を頼家遥ょ吟ゆひて昔よりあらの海ょ悪魚の栖ることを吟ぞたへ浦人ホが横ざゐよるたゐ作りらゐゐぞ

第五編巻の一ゐる出像并ょ姓氏目録中ょ浦太郎を備書ゐまつて浦二郎とも同編四の巻ゐる本ょ浦太郎とゐるよ

ゐん皆逐没れと敦圉ゆふ悪氣ゐのをきゐぞ浦人ホハ怕れ迷ふて困ぞく額を集めて左ゐゐ右さゐ商量ゐて所詮推辞ゐーとも免さをゐくべ。ゐ鬼をりて當ゐるれを生く艱を捕生べーとれゐ外ホをべゐーとそ各鬼をりく程ょ彼浦太郎が下ゐまけれがされがたとて散動ゐく人食敢ぶぞ中ゐ浦太郎ハ駭憂ひく取る紙蔵を傍ホ投捨ゐ。何ゐぞとれハ弟の喪ホ龍ゐて。けゐの役ょ駈出ゐるれゆーゐ。ゐ網引の人數ゐくるけれ雲ゐ時ゐりとゐよとそゐりゐ隊ょ入れられ。ゐ各位とハ格別ゐ人ゐの鬼をゐび取りーく吾侍と除死ゐくーと勸解ゐと衆皆吟ゐ。ゐ只ゐの勇勝ゐの辨ゐ喪ホ龍ゐとゐ看病をとも當役ホ四帷列ゐとの鬼ホ當ゐると。讓ゐとて誰ゐ受ゐ。ゐ死命を惜ゐれいるれど鰐ハ和主の仇ゐれが討死をゐても本意ゐるるべやとハいれ浦太ハ嗟嘆に堪ぞちゐホ稱ゐれゐるべ。鰐ハ婦翁の仇ゐるるよいゐ。ゐでゐるれどゐ千尋の

底に潜り入りて。誰かよく彼鰐を殺さん。忽地にその腹中に葬られんこと疑ひなし。浦
平との又吾倅どもこの海にして翁婆が悪魚のために命を隕すも只是過世の業報ぞ
かくあれば夫婦同胞うちも揃ふて命運薄く非命に終を取ることやと怨を
おちこち左右袖に落る涙を押拭へば衆皆あはれにおもへども義時忠常御諚を
待て催促あるべくありければ縡云云と訴へあげ浦太郎を扁舟に乗して先それや
濱へ出さんとて准備に暇なき折から傳告の青侍御仮屋に走り来り和田
常盛召によりて朝夷三郎義秀をゐて来りぬと訴へあぐると頼家きく〳〵
あひて義秀縦ば不来とも常盛共侶なほ又召べ潜没の技は今要時後に
そのなべれ浦太郎といふものはその仮屋のほとりに留置てその餘のものは且退
せよとて。いそがしくのたまへば近習の輩あらくして云云と相計ひ朝夷遅しと俟程に。
和田新左衛門尉常盛は義秀を相具してそれ御仮屋に参りければ頼家

これを御覧じて新左衛門尉は遠路の使節速に弟をゐて参着尤神妙なり。
現義秀が面魂勇力さぞあらん。その膂力を試んためは角觝の勝負に優るも
のなし。誰かよくその濱邊にて義秀と雌雄を決せん角觝にあひてのぞまんものは。
とく出よと仰られども豫てより義秀の勇力武藝に且怕れけんかけあへ
らんといふものなくて逡巡とするのみなれば御側に侍りたる義時これを尻目にかけて
進み對ひて稟す様。義秀は無雙の勇士武藝も又煉熟なれども角觝の
技においては長ずべし。かかればわが供の壯佼等に渠が敵はあらんやと覚候ぞ。
但し常盛も赤坂東なり。一手二手を争ふ勇士なれば角觝のことを好てよく
よくせんと訴へければこれとの兄弟に立あひて裔さべし。下底共も深く見るべしとまう
しも果ぬに頼家卿うち含笑て領なひ給ひ。その一手段あるべし。さらばこれを
ゆかしなば義秀従ひなまうば義時うち對ひて御諚を辞ひなまうなといはむ

惶恐くゆへども角能く勝員の烈しき兄が弟小勝員の人倫のうくを害ず。
倘其が諍て常盛小勝員長少の礼是より乱るゝ兄弟墻を鬩ぐの基欤
この義ハ聽させゆへくゝと憚る氣色もなく論じ立てを頼家卿宥めひそかに
所理あるふ似くれど大凡君を仕られい私親ゆく辭ぎ遣ぶいんやもまを
一時の奥ゆ。然るを推辞いそうこれ所なるぞ。あく勝員とゝまくはー立合せぎ
やと焦燥ゆへば義時忠常辭を盡しく宥るく如く懇切ゆる仰を固辞ゆ
乱を枉く誠意を後ひゆへこれと義秀脱る路なく。あぶりあぶらも美服
きく立あがらんとしけるを頼家雲時と留めさせて。あ乗替の駿足を假屋の
門ゆの牽出さて指ー示ゆく宣ふ常盛義秀彼を乞よ抑彼駿馬ハ
近比官令廣元が進らせし。鮮明月毛と名つけて。特ふ愛ゆるれ
ども禄物ゆ牽ーたり。これを心の褒ゆ仰ぎ。と仰ぎ常盛

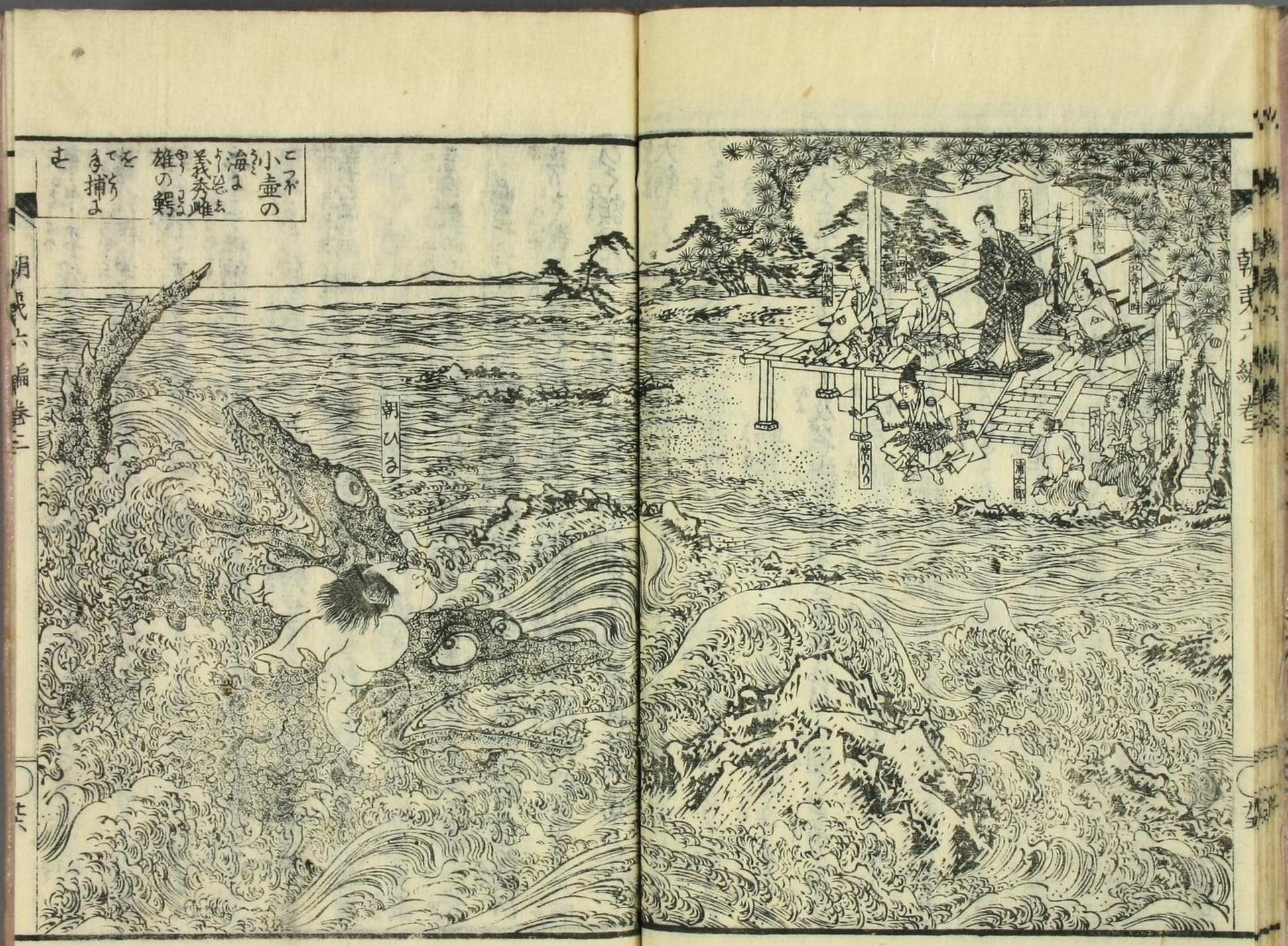
義秀阿とだゆりゆ合ゆくて遽ーく。あん前を退ぞく。御假屋の前面ゆ濱の
真沙路ゆ立出く。衣裳を脱て磯馴松の枝ゆ掛とうち被ぎ数名の雑色
沙石を集め俄頃ふ土俵を造り出ー。小坂太郎ハ仰を稟く。行司の役ゆ
候ーけるゆくて兄弟東西ふ立ゆれ土俵の中に進ゆ入ゆ。呼吸を揃り虚実を覗ひ
雲時盤桓ゆ程ーもゆ。せば忽地行司が引く團扇と共ゆ齊一引組ゆ常盛
豫てより鮮明月毛を渇望ゆ。折もあらばと思ゆ。なりてゆくー賜んと思ゆ。
月ゆ。ふゆりーゆ。只管ゆ勝員を好ゆ。抜倒さんと角へども義秀ハ此ゆ動
ゆ。ぬ肚裏ふ思ゆ。ゆれ今家兄を掻攫て投ん難ゆ所為ゆ。私ども然ゆ。
ゆ。ぬ面目ゆ。ゆれ兄の為ゆ。ゆよゆ。恥ゆ。ゆりゆ。ゆれども初見ゆ。ゆ。将軍ゆれの
ゆ目前ゆく兄ゆれば。ゆ。譲ゆ。ゆ。勝員ゆ。ゆれ兄ゆ。ゆふ悔ゆれども。ゆ。生涯の瑕
瑾ゆ。ゆ。所詮勝ぎ勝員ゆ。ゆ。時ゆ。ゆ。穆ゆ。ゆ。とゆ。ゆ。思ゆ。ゆ。勝員ゆ

この好まを組み腕を振解て反くへ〻反くされ又引組んで振ほどく互の秘術虚々実々踏鳴しるちから足よ大地いかちこち減凹まぐ〻揉あつる半晌ばかり勝負も果ぎるとくんあ〻名ゝ為旦手拔手大隅隼人阿弥隼人野見宿禰蹶速ゆとも元来いとゝ優べやとて且感じ且呆れて瞬もせず目戍まり當下行司小坂太郎い假屋のかゝふちに對ひて跪坐せば声高安ふ既ふ腐ると如く優劣ゝ時を移せば疲労もさこれいあらくべ弦と伺へば義時時てうち頷て西龍雲間ゆ駿と飛さること〻西虎肉を爭ふとたい一虎い必傷くといかり左ゆも右ゆも勝負いあらじ〻とくうつけいへとゆふ小坂い吉を偽へく常盛と義秀を東西ゆ引まるち且く息絶吻せけり。ゆふ海ーゝる為体ゆ頼家御感大くさるゝ。當座ゆ勝負るーといへども駿馬い同胞ゆ賜るへかれば兄まれ弟まれ望るれとく取れゝ〻と仰も果

寄ゆ義秀ゆ赤裸ゝ〻く件の馬ゆ倏忽間りとうち乗ら〻馳出さんとせ程ゆ常盛大く驚騒ぎく。馬の尾毛を焚と取り引戻さんとしけを義秀透さも馬ゆ指入れ一ト中礫とゆ〻まけれい馬い尾頭を引断離く海へ入水と馳入ゝ常盛ゆを追んとも〻水戯未熟るをとも推つぎて水ゆ沼入らも波打陸ゆと抗く返せゝと呼れとも義秀い耳ゆもけば安房の海造ゆ成長りて水戯水馬ゆ自由を泳れい馬の平頸うち越も可の波も風ゆも物ともせい逆前面の澳中ゆ顕れ出さる高嶽ゆ乗ゆんとて泅せゝ君臣更ふこれをんく。速騎ゝ馬もゝ彼巌まぐ坂東道三四十里六町一里えゆあんゆとく。ゆてび臭ゆも入りゆ浩処ゆいと大死る鰐の波を蹴立て義秀乗ゝ馬の後方ゝ走りかるとんえゝ馬い忽地骸骨を後足ゝけく噬断きけんそゝゝの潮水い鮮血ゆ変じて噴ゆあぐ主ゝ共ゆ波の底ゆ沦

けるに、ひろけるに形勢ハ君臣忽地奥醒くめれよくと叫ぶのこゑ五六十町ばかり
なる海ゆゑ、ものすごくよ。敖よ徐もまろりけり。是より先ハ常盛ハ遽しく衣
裳を着くきたらめしげハ海のさまをうち眺めくねるよ件の緋の景迹よ
いといとう駭憂ひて義時忠常ハと商量つ又浦人とハ聚合さく切く
ハかゞ亡殿ゆりとも舩りく拯ものこゝろせんとくきくいもゞ一立る程ハ義秀ハ
波の底を十四五町ばかり潜り来よけん忽地波上ハ浮き出ていと大なる両隻の
鰐を左右ハ禁と抱絞て水陳一泡ばかり濱ハ遍ハ赤ゆ。
件の鰐を投出もハ海内を雙の大力士ハ吭を扼られ至けもゞ鬼畜ハ
一死巨鰐ゆれども血を吐くて暇しく僅ハ四足を動ものこゝ又生べもわきり
と君臣うちうちく舌を吐駭嘆ぜたるハ鰐の大なるゆゑ一隻ハ
八尺ばかりなるべく一隻を些一分ばかり長ゆ郷高ハ浦人ハかゞ雌雄二隻の

大鰐とく怕ものれハ疑ひるゆ。さもくとゞろハ霎時ハ鳴ゆこぎりけり。
ゆるゆるハ浦太郎ハ假屋の戸とりとり進ハ出跪坐ゆくせりく訴ゆる
ハ郷高ハ上ゆ上ゆこくこの鰐共ハ僕ハ婦父浦平が讎言敵ハ年来怨を
復んと思ハのれうちうち及ゞ欝憤ゆるくもるくゆひゆハ圖ゆむ男士のまを
借く夙志を遂ものこゝを願ふハ今この悪魚を一ト大刀刺ゆへゆ。
と又他ものもくゆもまうまを義時ハ眼を瞪ゆ見奴匹夫の分際ゆ。
御所のゆん目前ものも憚りもまうむ鰐ハ妻親の仇ゆまゞ云云とまうゆ。
刃の程ハ白物ゆりゆ能り立ものと辭尖鋭く叱られて浦太郎ハ
阿とゞりゆ応ハもれゞ立難く汐ハ額を痍てゆ。その間ハ義秀ハ
ものく濡ゆ刃を拭ものゆ遽しく衣裳を被ゆ義時ハうち對ひて相州某一
言ゆこの浦太郎ハ匹夫ゆれゞも婦父の為ゆ怨をゆる鰐を殺さんと思ひ


こつぼ
小壺の
海よ
義秀雌
雄の鰐
を
捕よ
朝ひる
朝夷六編巻之三
朝夷六編巻之三

事年あを歴く志の根らゆゞ今ゝよゝ名もゝへゝで一ト大刀刺んと
冀ふ便是義丈あるぞや編蓬の中ゆもかくの如死義丈あるこゝ士風を
起せ後ゝまでも美談とまつべし鰐い某ゞゑ捕ませ恩賞ふ請まう
まく今此浦太郎よ刺せべそれを不敬とせられるべそのゝ名ゆ某ゞ刃
ひとちよゆんのこ此ゝまうさせゆへゝと舜せゝく理を推て亦浦太郎ゝち
對ひ汝が所願その義よ稱へゝこれをもそゆひのまゝよ刺さく怨を復ゝ
大刀を貸ゝけゆゝ浦太郎歎びく刃を引拔死登ゝかゝるゆ偏息ゆ面
隻の鰐の吠のゝをを刺んとゆるゝ皮堅ゝて刃を受ゆゝ又刃尖を口中へ突入
ゝゝぬきそゞ刺留ける當下浦太郎い單衣の袖をとそ刃の鮮血を拭ひ
まりく鞘よ納めく義秀ふ返ゝく雲時額をつ死又御假屋のゝゝよ向
ひく額つ死拜ゝく遽ゝく舊の処よ退死ゝ賴家これを御覽じて驚く

常盛義秀をほゝ近く召のぼゝて汝達が角觝のゆ段い何ゝ兄とせん何ゝ
弟とせん絶く甲ひゆ死めゝ就中義秀ハ水戯水馬の衆人よ捷れるのゝゝ
毒龍ゆもまく劣ら必両隻の鰐と水中ゆく輙くゆ捕ふゝゆ文学武
藝ゝゝ差あれども彼唐朝の韓退之が功德よ伯仲ゝ死ゝめ既ふ禄物とゝ
牽ゝる鮮明月毛い悪魚のゆふ傷けらまく底の水屑とゝりゝゆ更よ又座
右ゆ鎧一ト具と取ゝてん常盛ふ近死日ふ駿馬をえゝみく賜べゝ又彼浦太
郎とゝいふ漢丈が鰐を刺んと願ひゝゆゝの志神妙ゝ見ゝより漁猟の便著ゝ汚そ
小壺の浦人安堵せゝ皆義秀が功をゝゝゝ鰐い翌ゝゝ三日の間この処よ祭四訓
しゝ衆人ゝゝ安せゝむゝ死ゝ昔ゝゝ浦正ゝ仰ゝべゝ日もゝゝ西よ没んとゝゝ
遊ゝゝ見ゝゝ義秀ハ常盛共侶今宵い且宿所よ退ゝゝ翌ゝゝ営中よ
ゝゝ仕へゝゝゝゝゝ欠と叮嚀ゝ唱ゝゝゝゝ里華威の鎧一ト櫃を賜ゝ

誘久らんとく立せゆく弐時忠常以下の近臣雑色奴隷に至るまで前駈後
従の隊伍を整へ先追ひ来る鼓譟蹕の声いそ〻ぬ黄昏時陸續として齊々
とうけたまゝ常盛義秀い濱邊よりるく跪坐く恩を謝し拜し別れて目送り
なること半晌なり身を起さんとしてけるふいの程ゆ浦太郎も膝折俯く後
べ方ふとり義秀ゞ袂を引く朝夷大人悼りゑぐら等せゆく嚮ゆいよよ死ん好
情ゆく鰐を刺苗く鬱憤を散〜る欽びい辭も述も盡〜くこゝ〻まぐ
たらんそらん僕い陸奥ゆく大さるゝぬ恩を稟る彼葛三郎が異父兄
弟ょ小名穂之助と呼れしゆ之就く竊ゆゆげ〻死一下條のゆゆ且く苗
里ゆくゝ〜と又他ゆもるくらひ来ゆ生けり畢竟浦太郎が義秀と請苗
ゆく又甚麽る話説うゆ。そゝ次の巻ゆ解分るをゝく知らん。

朝夷巡嶋記全傳第六編巻之三終

早稲田大学図書館
011888007433